

サマンバヤ通信

サマンバヤの会 THE GROUP OF SAMANWAY

インドの子どもたちの教育のために
for Education to Every Child

CONTENTS

2007 年度総会を開きました / 2007 年総会報告 / 「スゴイぞ! インディア / インド全州の旅 / 新春特別企画報告 / 舌で感じるインド



ニームの枝で葉をみがくアシュラムの子どもたち (2006 年 3 月)

2007 年度総会を開きました

2007 年 1 月 13 日、東京事務所にて総会が開かれました。総会決議に対する出席者は委任状を含め 7 名、2006 年会費納入会員数は 35 名でしたので、会則により会員数の 5 分の 1 を超えた出席と認め、総会はギリギリの数でしたが成立しました。他にボランティア会員 3 名が出席しました。

いつもより寂しい新年会と総会になりましたが、懐かしい顔ぶれが揃い、新年会らしい楽しい雰囲気です。総会を行いました。次第に会費納入者が減り、厳しくなった財政事情を背景に 2006 年度会計報告と 2007 の事業計画、それにとまなう予算案の検討、人事、そして、1 月 29 日 (土) に予定していた久しぶりのイベントに関する話し合いも行い、後半はシッカリした議論を行いました。東京事務所で行ったこともあり、今年アルコールぬきの新年会となりましたが、新しい年を迎え、また新たな 1 歩をサマンバヤの会は踏み出す決心をしました。その 1 つが、しばらく続けてきたスモールグラントをやめ、いわゆるマイクロクレジット方式 (シード・バンク) を始めるという決断でした。これにはまだまだ大きな山があると思いますが、現地のアシュラム卒業生たちと協力しながらぜひ成功させたいと考えています。

2007年総会報告

活動計画と予算案に絡む案件としては、会員数の減少の結果、サマンバヤ・アシュラムに対する養育費名目の送金を今年は更に減額をせざるを得ないということになりました。

サマンバヤ・アシュラムには養育されている子どもがいて、その養育の要望が高いことからなどありますが、会員数の現状（里親 25 名）を考慮し財政上、無理の無い形で実施する予定です。また、全予算が縮小するに伴い各項目の予算も減らすことにしました。サマンバヤ通信の季刊化（隔月刊を季刊に）、郵便・通信費の観点からサマンバヤ通信の送付者の見直し、学生ボランティア会員交通費の見直しをそれぞれの状況に応じて考えることにしました。また、パソコンを利用している人にサマンバヤ通信をネット配信できれば、さらに経費を減らせるので引き続き検討事項となりました。

里親会員の減少にもめげず今年からシード・バンクを始動します。会員の皆さんからのご理解と定期的な会費の納入を今年もよろしくお願ひします。

2007年度の人事は以下の通り

代表 寺田文男

副代表 須田沃 大橋正明

事務局長 木村裕文

編集長 大畑朝義

企画 小林美晴

渉外 佐藤有紀

会計 原口真由美

2007年度新事業

シード・バンク（Seed Bank）構想

サマンバヤの会は、2002年から2005年の間スモールグラントとして助成金を出してきました。この助成金を受けることのできるのは、サマンバヤ・アシュラムの卒業生と、かつてサマンバヤ・アシュラムの先生であった人がリーダーとして活動をしているNGOとしていました。

毎年、このスモールグラントには当該のNGOからの給付の要望は絶えないものがありました。一方で、生活費や医療費のお金の困っている人たちからの「援助」の要望もありました。これに対して会としてはスモールグラントの趣旨から個人への給付をしませんでした。しかし、団体のみに給付をしていたのではサマンバヤの精神からいうと片手落ちではないかということで、サマンバヤ・アシュラムの関係者すべてに対し、お金を貸し出す機構作りを始めようとしています。2006年のノーベル平和賞で話題を呼んだマイクロクレジットという仕組みのような小口金融が目標です。これから規則、組織を作り、運営は現地（たぶんカイラーシュ氏を中心としたグループ）に任せ、資金を出してやるうというものです。原理的には貸し出されたこの資金は回収されるので、永遠と活用されることとなります。初年度7万円程度の資金を送り、運営の様子を見ながらそして会の財政状況を見ながら、毎年少しずつでも足してあげられればいいと考えています。生活支援、起業融資など低利な融資が活力を生み、健全な運営を求めることができればいいと考えています。



2006年度 会計報告

2006年1月1日～12月31日

収入の部				支出の部			
項目	決算	予算	差額	項目	決算	予算	差額
前年度繰越金	117,056	117,056	0	アシュラムへ(40+35名)	519,860	550,000	-30,140
里親会費	699,000	720,000	-21,000	ボランティア交通費	72,000	70,000	2,000
(預かり金より)	48,000			スモールグラント	21,670	80,000	-58,330
(2004年度中入金分)	651,000			事務用品費	9,000	10,000	-1,000
賛助会費(11名)	80,000	75,000	5,000	印刷・コピー費	0	4,000	-4,000
受取利息	6		6	活動費	0	11,000	-11,000
				郵便・通信費	54,400	60,000	-5,600
				支払・為替手数料	8,400	10,000	-1,600
				雑費	0		0
				2005年度繰越金	210,732	117,056	93,676
収入計	896,062	912,056	-15,994	支出計	896,062	912,056	-15,994

2006年度 予算案

2007年1月1日～12月31日

収入の部				支出の部			
項目	2007年度	2006年度	差額	項目	2007年度	2006年度	差額
前年度繰越金	210,732	117,056	93,676	アシュラムへ(35名分)	490,000	550,000	-60,000
里親会費(25名)	600,000	720,000	-120,000	ボランティア交通費	36,000	70,000	-34,000
賛助会費(15名)	75,000	75,000	0	スモールグラント	0	80,000	-80,000
				シードバンクプロジェクト	70,000	0	
				事務用品費	2,000	10,000	-8,000
				印刷・コピー費	2,000	4,000	-2,000
				活動費	5,000	11,000	-6,000
				郵便・通信費	60,000	60,000	0
				支払・為替手数料	10,000	10,000	0
				予備費(繰越金)	210,732	117,056	93,676
収入計	885,732	912,056	-26,324	支出計	885,732	912,056	-26,324

「スゴイぞ！」インディア

当代表 寺田文男 (TERADA Fumio)
インドで出会った「すごい」。

今さら言うまでもありませんがインドの交通は、人は右、車は左と日本と同じですが、大英帝国の影響がロータリーの存在にある気がします。英国が作った都市、例えばニューデリーなどでは、交差点にしないでロータリーを多用しています。ロータリーのイメージとしては、パリの凱旋門の周りを回る道路を想像してみてください。ロータリーは流れを重視しているので理屈では渋滞がないという構造のようです。想定交通量を超えればロータリーだとどうにも動かなくなるのではないかと心配です。そして、大きなロータリーになると、慣れていないとそう簡単には運転できそうも無いという心配もあります。

例えば、ロータリーを6時の方向から3時の方向に行くとしします。つまり、結果としては交差点で言う右折ですが、車左側通行では時計の針と同じに回転しますので左折してロータリーに侵入、次の角から侵入してくる車の進路を空けるために、徐々に内側に寄って行きます。さらに自分の目的の角を左折するために今度は外側に寄っていかなくてはなりません。車がたくさんいたら、周囲を見ながら目的に向かい、左折の角を探しながら・・・ということが頭の中で処理できそうもありません。大きなロータリーは都会にあります。地方の町にもロータリーはあります。交差点の真ん中に柱1本立てればロータリーの理屈で交通できます。実際には柱1本ではなく古い小さな門や立像があったりするのですが。

かつて、フィリピンの田舎町でオートバイを運転することがあって、中央に花壇か何かのあるロータリーを結果として直進したのですが、これが右側通行ですから、ものすごく緊張したものでした。交通量はほとんど無かったので事なきを得ましたが、この20分ぐらいがフィリピンで唯一の運転経験でした。因みにインドでは一切運転はしていません。

で、インドには信号機がないかというとなんな

ことはありません。信号機もあれば、今は日本ではなかなかお目にかかる機会の無くなった交通整理のおまわりさんもいます。そして、これはニューデリーで見かけたのですが、カウントダウン方式の信号機。あと何秒で青になるかを数字で表示しています。日本でも歩行者信号にカウントダウン表示をしているところがあると聞きましたが、このニューデリーの信号が巻き起こす騒音がすごいのです。信号自体はいたって冷静に時間を刻むのですが、いざ青になったら飛び出そうとする赤で待たされている連中が、レースのスターとよろしくブンブンとアクセルをふかすふかす。その多くは車の間をすり抜けて先頭に出てきたバイクたちなので、いやーウ・ル・サ・イ。信号待ちをするイライラの解消の手助けになっているかもしれませんが、同時に青になったらいち早く飛び出すための競争心にかかるストレスと、周囲の人の騒音に対するストレスが増すだけの信号機のような気がしました。

ただ、この信号機、カウントが0になった時に信号が青に変わったかどうか、よく見てきませんでした。



ニューデリーの街中

サマンバヤの会ブログのご案内

<http://www.ratio.co.jp/blog/samanway>

お気軽に、どんどんいらして下さい。

通信への情報提供も大歓迎です。

good_morning_and_thanks@yahoo.co.jp

大畑までお気軽にお送りください。原稿に採用された方にはサマンバヤ通信を贈呈いたします。

インド全州の旅

東京農業大学 4年 佐藤有紀(SATO Yuki)

今号からインド全州の旅、再開です。

今回は「ヒマーチャル・プラデーシュ州」を一緒に周りましょう。

[概要]

州都：シムラー

主要言語：ヒンディー語、バハリー語

人口：6,077,248人

面積：55,673 k m²

一人当たりの収入[2000-01年]：Rs.10,942-

読み書き能力[2001年]：77.13%

男性 86.03%

女性 68.08%

電気普及率：100%

電話機普及台数：145,505器

病院数：632軒

地理：東は中国のチベット自治区、北はジャンム・カシミール州、南西はパンジャブ州、南はハリヤーナー州、ウッタル・プラデーシュ州、ウッタルANCHAL州と接しています。



州都のシムラーはダージリン、ムスーリーと並びインド三大避暑地のひとつで英国当地時代には夏の間の州都であっただけに標高は2213mもあります。他にもクルとマナーリーというヒマラーヤ山地の谷間にある観光地もあり、ヒマーチャル・プラデーシュ州(雪山地方)という州名にふさわしい雪山が見え、温泉も堪能できます。

この州にはもう一つ有名なスポットがあります。

それはダラムシャーラーです。ダラムシャーラーはチベット文化の中心地として知られています。それはチベット仏教の法主であるダライ・ラマ14世が中国のラーサからチベット難民と共にこの地に亡命したからです。ここではヒマラーヤを眺める景観もさることながら、ダライ・ラマ法主公邸での謁見やチベット寺院をまわり、読経の声やチベット仏教僧侶の五体投地礼を見るのも興味深いかも。私が2006年2~3月にサマンバヤ・アシュラムに滞在していた時、その一週間前にダライ・ラマ14世がアシュラムの前にあるマハポディー寺に巡礼に来ていたそうです。

私の滞在中にもヒマーチャル・プラデーシュ州から来たチベット仏教僧侶の姉妹が、アシュラムに滞在していました。彼女たちは小豆色の袈裟を着て毎日寺に通いながらゲストルームの中で自炊していました。部屋の中に呼んでくれてチャイをご馳走になったり、よくビスケットをくれたのを覚えています。プタガヤの街の中でも小豆色の袈裟を着たチベット仏教の人、五体投地礼する人を良く見かけました。私もいつかヒマーチャルの雪山とチベット寺院を訪ねに行きたいと思いました。

2007年サマンバヤの会 新春特別企画 ~サマンバヤ・アシュラムから見る現代インドの課題と改革への試み~ 報告

大畑朝義(OHATA Asayoshi)

今年の冬は地球温暖化の影響か、暖冬で、この日も1月とは思えないほどの暖かさだった。参加者は発表者が7名、社会人が3名、学生が6名(内4人は東京農大生で1人は東京学芸大生)で当初の予定よりも参加者は少なかったが、小さな部屋に変更して、お互いに参加者が意見を言い合える程度の、ちょうどよい空間となった。

このイベントの内容は次頁の通り。

第一部

・現地訪問レポート1

「サマンバヤ・アシュラムの子どもたち&ヒンディー語表プロジェクトについて」

大畑朝義・小林美晴（東京農業大学 アジア・アフリカ研究会 第九次インド隊）

・現地訪問レポート2

「指定カーストに対する優遇措置の実態」

栗原希（一橋大学）



第二部

・「インド二大叙事詩の完成に向けて、池田運氏の成果と今日的意義」

木村裕文（サマンバヤの会 事務局長）

・「NGO大国インドの中のサマンバヤ・アシュラム」

大橋正明（恵泉女学園大学教授）

・「サマンバヤの会の新たな試み/スモールグラントからマイクロクレジットへ」

寺田文男（サマンバヤの会代表）

題としてあるのはドワルコ・ジー（サマンバヤ・アシュラムの代表）が既定の教科書での教育を嫌っていて、だからといって独自の教材も用意できていないことであった。栗原さんは卒論研究の「指定カースト優遇措置の限界と可能性」について発表した。栗原さんは巧みな英語力を使って、アシュラムを拠点にインドで村のリーダーやNGOのリーダー、大学の学長、ビハール州教育大臣の方たちにインタビューをするという活動をしてきた。そして、沢山の人に話しを聞いていくと色々な問題が絡み合っていることを知ったという。

第二部では諸事情でこの会に出席することが出来なかった池田運氏の今までの業績などを木村氏が発表した。池田運氏はドワルコ・ジーとアシュラムの創設当時の知り合いでもあり、今までに数多くのインドの本を翻訳して出版されている。最近では「ラーマヤン」、「マハバーラト」、1998年に出版した「ガンジー自叙伝」などがある。また、大橋先生は大学の講義で数時間かけてやる内容をとてもわかりやすいように30分程に要約して、マシンガントークでNGO大国インドについて話してくれた。また、寺田氏はサマンバヤの会の新たな試みとして「Seed Bank」という名前でマイクロクレジット¹をしようと考えていることを話した。

このイベントの最後は少人数ということもあり、参加してくれた方全員に感想や自己紹介を言ってもらった。その中にはインドに半年間滞在し仏教

¹ マイクロクレジットとは銀行から融資を受けられない人々を対象とする非常に小額な融資である。



第一部では去年、実際にインドに行ってきた学生たちが発表を行った。農大生はサマンバヤ・アシュラムで子どもたちと一緒に教材としてヒンディー語のあいうえお表を作ってきたことについてパワーポイントを使って発表した。農大の学生たちは教科書のないアシュラムに何か出来ることをしたいという思いでアシュラムを訪れていた。そして、アシュラムの教育の現状も伝え、アシュラムに教科書が無いのはお金の問題もあるが大きな問

の四大聖地をまわった学生がいたり、すでにインドにどっぷり浸かっている人たちもいたりした。

今回はとても小さいイベントだったが、こうやってサマンバヤの会に興味を持ってくれる人が出てきてくれることはとてもうれしいことである。こういった人が増えてくれたらと思うので、是非これからも何度もイベントを開いていきたいと思う。



舌で感じるインド

栗原 希 (KURIHARA Nozomi)

インド滞在の最終日、道端で作られていたサトウキビのフレッシュジュースを飲みました。水や氷は危ないと言われるし、味も心配でしたが、作っている人の素早い手さばきに惹かれてどうしても飲みたくなってしまいました。味は大切ですが、インドにおいては味そのものよりはむしろ飲食を通して出会った人や出来事が印象に残ることも多い気がします。今回は、12月号でも紹介されていた「チャイ」をめぐる人々の様子を書こうと思います。

チャイは街のいたるところで売られています。もちろんレストランにもありますが、やかんを持って移動して売る人も時々見かけます。そしてチャイの大きな特徴は、それがその親しみやすさゆえに人と人を結ぶツールになっているところだと思います。たとえば、コルカタに滞在していたとき。インターネットカフェに通ううちに、経営者のお兄さんと少しずつ話すようになりました。何日か経った頃、ネットをしていると突然真横にチ

オリッサ州ブリーのチャイの店



ャイが。飲んででもいいのかと聞くと、にこっと笑ってうなずいてくれました。ネットカフェには他にもチャイを飲んでいる人たちがいて、経営者の人は全員分のお金を払っているようでした。売っていたのは小さな子ども。学校に行っていないのが気になりましたが、皆がチャイを飲んでいる間は安心したようにそばに座っていて、チャイを通してその場の空気が和らぐのを感じました。さらに忘れられないのが、ガヤからデリーへ向かう列車のなか。辛いものを食べてしまい口中がひりひりするのにチャイを売る人を呼び止めることができず困っていたとき、周りの人たちが大声で呼んでくれました。飲んでいる私に「チャイはおいしいだろう」と満足気な顔。飲んだチャイの味はあまり覚えていないのですが、チャイという言葉を聞くとあのとき感じたあたたかさを思い出します。

チャイはインドの国民的な飲みものと言われます。それが全国的に飲まれているためだと思われませんが、人と人を結び、その場をあたたかくすることが多いチャイは、まさにそのことだけでインドの寛容さを体現しているような気がします。



サマンバヤの会とは

当会はインド・ビハール州にあるサマンバヤ・アシュラムに対して主にアウトカーストの子どもの教育のために、里親という形で資金援助をする窓口として活動している会です。

里親といっても日本へ子どもを連れて来て、養育するわけではありません。養育費を負担して、インドのサマンバヤ・アシュラムへ送金することを意味します。

1人の里親の申し出があった時点で、アシュラムでは周辺の家庭からアシュラムでの養育を望む子どもたちを受け入れます。その子どもに対して5年間、養育費を送ります。そして、その5年が過ぎ、さらに5年間を子どもはアシュラム内の農作業などをして生産の助けをしながらアシュラムで生活をします。そして、「卒業」ということとなります。養育費はアシュラムの財政の中に繰り込まれ、その中から子どもたちへの諸費用を出していくという仕組みです。

サマンバヤ・アシュラムとは

サマンバヤ・アシュラムはガンディー翁の高弟の1人、ピノーバ翁が創設し、その弟子の1人であるドワルコ・スンドラニ氏が中心となり、その運営にあたっています。

インドには「アシュラム」という組織があります。アシュラムとはヒンディー語で直訳すると「同等の仕事」となりますが、「精神修養の場」とか、ある種のセンター的役割を担う組織を指したりします。サマンバヤとはヒンディー語で「調和」とか「融合」などを意味します。英語では「harmony」にあたります。つまり、サマンバヤ・アシュラムは「調和のための修養道場」となりますが、インドの、そして地球に住む全ての人類の調和を目指す研修施設と言えるでしょう。

サマンバヤ・アシュラムでは、子どもの教育こそが未来のインドの開発のためになるという考えの上に立ち、身分制度の為に抑圧されているハリジャン（不可触民）の地位向上のために、その子弟の教育に重点を置いています。

入会案内

里親会員

サマンバヤ・アシュラムが養育する子どもの資金を援助します。

里親会員に登録されますと、サマンバヤ・アシュラムは養育すべき子どもをサマンバヤ・アシュラムに連れてきて養育をはじめます。

5年間はその子どもの養育費を里親会員が保証することとなります。

支払い方法 5年一括 120,000円

1年ごと 24,000円

半年ごと 12,000円

いずれかの方法でお送りください。

会費のうち、1年あたり14,000～15,000円(120USドル相当)をサマンバヤ・アシュラムに送金し、残りをサマンバヤの会の運営費用に充てます。

サマンバヤの会からサマンバヤ通信を送付します。

賛助会員

サマンバヤの会の活動を資金面で支え、応援していただきます。

会費は1口5,000円/年で、サマンバヤの会の運営費用に充てます。

サマンバヤの会からサマンバヤ通信を送付します。

入会方法

入会のきっかけ、経緯、TEL、さしつかえなければ職業、Miss,Mr,Mrs,Msを記入して入会申込書として本部宛に郵送またはFaxしてください。会費を郵便振替または現金書留にて送金してください。

入会の確認がされたことを通知します。

会員証は発行していません。

継続の場合

会員として継続される場合

会費を郵便振替または現金書留にて送金してください。

入会の確認がされたことを通知します。

退会

会を退会する場合、速やかに文章で(郵送またはFAX)お送りください。

但し、里親会員で会費未納分については請求する場合があります。

郵便振替口座 番号 00260-3-15712

名称 サマンバヤの会 宛

編集後記

インド独立から60周年目という節目の年に新編集長になりました。去年インドに行ってきた、インドに魅了されてしまいました。初仕事ですでにどたばたしてしまいましたが、面白いサマンバヤ通信を目指してがんばります！ブログの方も頻りに更新していきますので、ぜひ覗いてみてください。

皆様のお宅の桜の頼りも楽しみにお待ちしております。編集スタッフ全員、張り切って新しい1年を迎えています。OA

今回の定例会は2007年3月10日(土)午後2時から東京事務所です。

宛発行：2007年2月10日(隔月第二土曜日)

発行人：サマンバヤの会

本 部：〒299-4423 千葉県長生郡陸沢町大上 3615-3

TEL・FAX：0475-40-9795

東京事務所：〒113-0033 東京都文京区本郷 5-1-16

NP-ビル5F 東大教育研究所内

TEL：03-3815-3035 FAX：03-3818-1219

印刷：株式会社ラティオインターナショナル